理研会報

発行
印旛研理科研究部
事務局
成田市成田950
成田小学校内

新年度を迎えて

研究部長　板橋義夫

希望に満ちた春と共に昭和四十四年度を迎えました。新入生の姿にも何か新鮮な心のひきしまる感がいたします。

本会報もすっかりおなじみになっていただけたことかと思いますが、本年度も種々工夫をこらしてご期待に沿いたい所存です。より以上の御支援をいただきたいと存じます。

植物栽培のてびき、いかがでしょうか。これからがいよいよご活用いただける季節、読むだけでも楽しいものです。又読めば必ず栽培したくなるのが人情です。各校の観察園が幾分でもにぎやかになれば研究部としてこれにすぎる喜びはありません。

昭和44年度の夢

洗心小　折目庸雄

思ったことの何%実現するかは別として、年度当初にはいつも夢を見ることにしている。それは一年間の私の仕事のエネルギーとまではいかないにしても、方向づけとしての役には立っている。

一、学校の理科担当者として

(1)先ず使いやすい理科室にしたい。名ばかりの理科室ではあるが、あることはありがたいことである。理科学習に必要なものはちゃんと手に入る部屋、消耗品、作業用具その他こまごました石っころ茶碗かけまでたんねんに集められている場所、そんな室にしたい。

(2)農村の自然は豊富である。一歩外に出れば自然そのものである。しかし、子どもたちは不感症のようにそこから何も学ぼうとしない。あまりに当然すぎて、そこに学習すべきものを見出せないのであろう。それに目を向ける窓を開いてやりたい。もちろん授業の中で大きく開かれねばならぬが、学校環境がそのまま児童に働きかけて、窓口としての大きな役割を果たすべきだと思っている。野外環境だけではない。壁面、教具等だって児童に働きかける力は充分持っているはずである。

(3)移行指置がはじまる。新しい教材がいくつか入ってくる。そういう教材について研究する必要がある。例えばシヨウジョウバエの観察、卵の孵化などは自分自身がやってみなければ指導はできない。もちろん個々の内容だけでなく全体の計画の検討も大切なことは当然であろう。

二、個人として

好きな道であり、やりたい事は数えきれない。主なものだけ挙げると、

(1)いくつかの科学的概念(力の概念とか、粒子概念とか)。科学的能力(比較観察力とか推理能力とかいの分析と、それを育てるための指導過程について研究的に扱ってみたい。幸い、本年度は三、四年の理科というフイールドに恵まれた条件を生かしていきたい。二部会の研究テーマ「力の概念」も何とかまとめていかねばならない。

(2)昨年から引き続いての露頭調査を拡大する仕事もやりたい。単に露頭の紹介だけではなく、それを利用しての学習のあり方にまで発展させたい。それにともなって実際に野外を歩く機会が多くなろう。地学学習に使えるスライドや写真も集めたいと思っている。機会に恵まれれば、化石をさがし、岩石を求めて県外へも出たいと思っている。

(4)やりやすいようでやりにくい野外観察について研究したい。一人ではむずかしい。村や部会の研究部の活動にして、いくつかのルートを決めて、そこでの指導について考え、まとめ、手引き書のようなものを作成してみたい。

(5)小学校における科学クラブ(真の意味での同好的な集まり)を育ててみたい。いくつかの問題点もあろうが、やってみたいことのひとつである。

等々……春眠なかなか暁になりそうにもないので筆をおく。

皐月づくりあれこれ

酒々井中　榎本正二

戦後観葉植物が非常な人気を呼び花屋の店頭をにぎわしているが、皐月栽培もまた流行をきわめている。とくに皐月は栽培の歴史が古く、古風で東洋的な美しさがあるので愛培家の層も厚いように思われる。

皐月の名の起りは昔から当名を「五月(さつき)」としているのは開花期から当てられたものと思われる。皐月は「ツツジ」の仲間であって一般のツツジ類は四月に咲き、開花が六月(陰暦五月)のものを特に皐月といわれるようになったと伝えられている。大和、平安、奈良の頃から栽培されていたのではないかと思われるが、正確な記録のないのは残念である。「慶長二年(一五九七)に豊臣秀吉公が朝鮮の陣代使者を迎えるに当り、ツツジの如き性質なるも、花の形はリンに似て、色は一花咲きなり。赤色と白色の咲分けせるを皐月の源平と名称して、庭前に移植し、使者の労を謝し、日本国の美を誇示せし処、使者はその妙味と美麗に瞠目し、大いに感動せる模様なり。」とある。

これは現在の品種の千代田錦と思われるが、この記録により当時すでに皐月が愛培されてその美を競っていたものと思われる。

江戸時代になると覇永より万延までの二〇〇年間は泰平続きで園芸品は盛んに愛培観賞され、皐月もその重要な位置を占めていたのではないかと思われる。それは当時発行された皐月の専門書である「錦繡枕」「地錦抄」「長生花林抄」などの文献によって明らかである。

皐月の品種の一つに「護美錦」というのがある。この「護美錦」について次のようなない伝えがある。旧名を「断罪」といわれていた。下野(今の栃木県)善通川の城主左馬亮頼照に世嗣がなく、嘉永年中(一八五〇年代)に細川越中守の子護美を養子にする際、細川家秘蔵のこの花を持ってきた。頼照は非常によろこんで、この花にふれる者は断罪にするとの制札を立てたことからこの別名がついたという。後年、護美が病にかかり細川家に帰ったが、この人を慕って「護美錦」と改名したといわれている。

このようなことからも皐月は江戸時代に盛んに愛培され珍重されていたことがよくわかる。

明治から現在に至るまでの間は一時戦争中のブランクはあるものの愛培家のグループが結成されたり、品種改良などがさかんに行われ、品種の数も非常にふえ、特に戦後の園芸ブームに刺激されて皐月栽培はますます盛んになってきたようである。

皐月が流行するためにはそれ相応の理由がある。それは皐月自体が天性的に入門しやすい条件をそなえているからであるといえる。

いまここでその条件のいくつかをひろってみることにする。

(一)花を咲かせる楽しみがある。しかもその花は変化に富んでいて美しい。

(二)ほかの盆栽、たとえば五葉松や檜柏などにくらべて非常につくりやすい。

(三)どこでも栽培することができる。

(四)自分のさしたさし芽でりっぱに花を咲かせることができる。

(五)成長が松柏類にくらべて非常にはやい。

(六)木が丈夫で折れてもまた芽を出し、再び枝を繁らせることができる。

(七)自分のほしいところに新芽をふかせることができる。

(八)品種が多く栽培の興行きが深い。

(九)花の色や形をはじめ、花の咲き方にいろいろの変化があり、観賞のゆがたい。

(十)はやりすたりがない。

などを挙げることができる。十項目ばかり挙げたのであるが、実際に栽培の経験のない者にはなかなか栽培の楽しみを具体的に理解してもらうには困難のように思われる。

―以下次号―

編集後記

○「移行期間中の小学校の教育課程については……小学校学習指導要領の特例によるほかは、現行の小学校学習指導要領による。しかし現行の学習指導要領の範囲内で新学習指導要領を生かすのは望ましいことなので云々」と文部省事務次官通達にありますように、46年を目標とした移行期間が本年よりはじまりました。各学校でどのような移行をしているか、ようすを会報へお願いします。

○「四十四年度の夢」――みなさんはどんなプランをお持ちでしょうか。